

ウルリム  
響

# 星 環

特定非営利活動法人

聖公会生野センター機関誌

第 56 号

2012年12月1日発行

題字：康秀峰

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

E-mail: [ikuno@nskk.org](mailto:ikuno@nskk.org)

聖公会生野センター 検索



こみち寄席も 120 回を迎えました。  
桂きん枝師匠の熱演です。

## コリアタウン

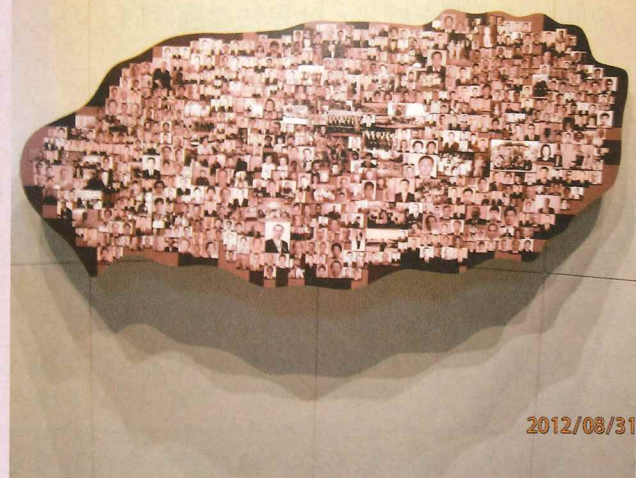


猪飼野にある朝鮮市場からコリアタウンへ  
＝観光客が押し寄せる街になりました＝



のりばんの楽しみ。公園で焼き肉です。

## 顔でつくった濟州島の地図



濟州大学で「在日濟州人センター」オープン。  
在日濟州人の顔写真で濟州島の地図が作られました。

「市場を安定させる目的で、商品を一時的に蓄えて市場に出さないこと」。次に「問題の解決・処理を延期すること」。「棚上げ」を辞書で調べればこう書いてある。いわゆる「領土問題」を巡って「棚上げ」を考えている。とりあえず触れない、問題に直面するのを先延ばしにするという姿勢は、あまりほめられたものではない。「白黒はっきりする」ことが潔いし正義にかなっている気もする。聖書にも似たようなことが書かれている。たしかにイエスは「二兎を追う」ことを嫌った。「ヨハネ黙示録」3章にも、「あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい」と、ラオディキアに対する告発の言葉が記されている。

諺も「沈香も焚かず屁もひらず」と凡庸さを笑うし、中途半端、優柔不断、立場を明らかにしない態度は狡猾で卑怯な姿勢だと言ってもいいだろう。聖公会に属するわたしはカトリックでもプロテスタントでもないことを揶揄されたりもするし、このことをコンプレックスのように感じる方々もいるかもしれない。ラオディキアへの裁きが念頭にあるからとは思わないが、熱いか冷たいか、右か左か、白か黒かはっきりさせることが善だという感覚は確かにある。その意味では「棚上げ論」は卑怯な逃げ口上のように聞こえるかもしれない。

日中国交正常化の過程で田中角栄、周恩来両氏は「尖閣諸島」問題を後回し、つまり「棚上げ」にした。「国交正常化」を優先させるといふ共通の認識によるものだ(『世界』2012年10月号)。「竹島・独島」を巡っても外交上の「密約」があり、事実上「棚上げ」された状態が続

いてきた。ところが昨今、「棚上げ論」はやめて白黒はっきりさせようと言いだした人々が登場した。安価なパフォーマンスと言えどもそれまでだが、生み出された結果は厳しい。暴力、排外主義が横行し軍事力の比較や「戦争」の文字までもが踊る。

もちろん「棚上げ」してはならないことがある。不都合な真実を「棚上げ」にし、今の安逸な日常を失いたくないと多数派が沈黙することは許されない。苦しみや悲しみの訴えを「棚上げ」し、その状態を正当化するために数の論理、権力、権威が行使されることがあってはならない。命にかかわる現場において経過観察は死を招きかねない。大切なのは問題の重要度を見分ける能力、「時のしるし」を今読み解く力だろう。無責任な傍観や狡猾な先送りではなく、未来を展望し緊急度の低い問題を「棚上げ」し、今ここにある問題に集中する力が問われている。

何を「棚上げ」するか、その選択に人間の価値があらわれるし組織の本質が試される。東北アジアの緊急課題は「領土問題」ではない。「解決済み」の名のもと、事実上「棚上げ」されてきた様々な問題によって今も人々は痛めつけられている。植民地支配の犠牲者、被害者の高齢化は誰も止められないし、米軍基地による被害は後を絶たない。痛みを負わされた人間の現実を見れば優先順位は明らかだ。そして「領土問題」によって引火した排外主義はさらなる人間の痛みを生み出している。権利主張のために暴力を加速させてはならない。島々を平和の礎石とする知恵を語りたい。

(かやま ひろと 東京教区司祭)

「棚上げ」・「しておくと」と「してはならないこと」  
相互理解のために  
香山洋人

今回から「時のしるし」の筆者が交代しました。長期間にわたって執筆して下さった井田泉司祭に感謝します。そしてこれからの香山司祭の「時のしるし」を楽しみにして下さい。

## 多様性のある教会 = 日韓の歴史を生きる =

呉 光現

10月12日から3泊4日、大阪教区の韓国歴史研修旅行のお手伝いで水原・ソウルに行ってきた。

毎年数回の訪韓をしているが今回ほど「多様な教会」を訪問したのはなかったと思う。3泊4日で5つの教会である。教派も聖公会が3つ、メソジストが1つ基督同盟会が1つと多彩である。そしてその教会のほとんどが日本と歴史的なつながりがあった。これも印象に残った旅の思い出である。

1919年4月15日、京畿道堤岩里の教会で村人たちが礼拝堂に押し込められて虐殺された。同年におこった三一独立運動の報復として当時の日帝の軍警がおこなったものである。「堤岩里教会事件」である。10数年ぶりに訪問して驚いたのは礼拝堂と記念館が新築されて記念館は行政の委託を受けて運営されていることであった。2000年からこのようなになったとのことである。2日目には水原にある聖公会水原教会と日本人で初めて朝鮮伝道をした乗松雅休牧師のまいた種である水原基督同盟教会を訪ねた。聖公会水原教会の司祭のホン・ヨンソン師は20年依頼のおつき合い。だか初めて知ったことがあった。ホン司祭の祖母がなんと堤岩里教会事件の目撃者であったのだ。そしてこの教会は現在カナダで宣教活動をしてるイム・テビン司祭のご両親の教会でもある。お父上のイム・キョンスン先生から昼食をごちそうになり、ウェットに聞いたお二人のなれそめをうかがいながら力強い信仰の証しに接することができた。韓国に行くといつも思うのは韓国のキリスト教が「力に溢れている」ことである。一部プロテスタントの眉を背けるような「伝道活動」は私の感性とは相容れないが、日本にいてる私たち



乗松牧師の墓碑の前にて

がついついないがしろにしがち「力強さ」は同じクリスチャンとして学ぶことは多いのではないだろうか？

ホン・ヨンソン師はこの日も温厚にそのことを語ってくれた。「私の祖母が当時クリスチャンだったら、私は生まれていなかったかもしれない」というひと言はまさに「私の父が日本に渡らず済州島に残っていたら私は生まれていなかったかもしれない」と自分自身と重なり合った言葉であった。

基督同盟教会は強烈な聖書の学びと礼拝を堅く守るという事、そして乗松牧師が当時数少ない朝鮮人側に立って徹底的に宣教活動をおこなった、ことが教会の敷地にある乗松師の祈念碑からうかがえた。

主日はソウル大聖堂の聖餐式。訪問する度に温かいおもてなしを受け、感謝であるが、このソウル大聖堂も植民地下の戦争のために聖堂が未完成のまま10数年前にようやく完成したものである。そして菊の紋章(天皇家の紋章)が刻まれている聖卓が礼拝堂の中におかれてある(これは水原の教会でもあった)。韓国人としては消してしまいたい歴史の遺物を残して伝えることは「誤った歴史を繰り返さない」思いが伝わってくる。それに比べて日本の歴史はどうだろう。過去を消し去り、ましてやあったことすらなかったとしようとする「力」が日本を覆っているのではないだろうか？この状況が続く限り世代が移っても「歴史問題」「歴史認識」は解決しないだろう。

最終日、聖公会の社会宣教の拠点である奉天洞分かち合いの家を訪れた。ここも主日にはミサを執行している立派な教会だ。礼拝堂の十字架は良心囚として40年以上獄中にとらわれていた先生がお作りになったものだ。何度も訪問しているがこの十字架の前では謙虚な思いになる。

その他書ききれないことはたくさんあるが、日本大使館前訪問や毎食安くて美味しいグルメも今回の旅の魅力だった。そしてなにより高齢者や体の不自由な方もいらっしやる中でお互いを思いやりながらの旅は僕にとって印象に残っている。

参加者の皆さん、現地の皆さん、そして主なる神を感謝したい。

(お・くあんひょん 聖公会生野センター総主事)

# 聖公会生野センター 20周年 = 会員総会とパネルディスカッション =

## 【会員総会】

6月17日、特定非営利活動法人（NPO法人）聖公会生野センターの定時会員総会が聖ガブリエル教会で開催されました。「定時」というのはNPO法人は年に1回の会員総会の開催が義務付けられているためであります。これは法の趣旨に従って「情報公開」「会員総会によって決定される」等の考えから来ています。

今年は2011年度の事業報告、決算報告、2012年度の事業方針、予算案の審議、承認に加えて2年に一回の役員の改正がなされました。新役員は理事長に大西修大阪教区主教が再任され理事・監査も提出議題とおり承認されました。感謝です。



20周年記念パネルディスカッション

## 呉 光現

センター設立20周年にあたる今年は記念のDVD作成をいたしました。これまでを振り返りつつ、現在の活動を中心に25分にまとめました。全国の教会、教区事務所、主教様、正会員にお送りしましたので活用くだされば幸いです。必要な方は聖公会生野センターに申し込んでください。貸出もおこなっています。

## 【パネルディスカッション】

又、総会当日には20周年記念のパネルディスカッションをおこないました。聖ガブリエル教会の復興をルーツにする聖公会生野センターにとってふさわしいガブリエル教会を会場にしたパネルディスカッションです。発言者は井田泉司祭（京都教区奈良基督教会）、木村幸夫司祭（大阪教区退職司祭・元聖公会生野センター運営委員長）、林永寅<sup>イムヨン</sup>司祭（京都教区岸和田復活教会・宣教協働者）、中村香氏（神戸教区・ウルリム執筆者）の4名。

井田司祭は聖ガブリエル創設者の故張本栄司祭の教籍簿が奈良基督教会にあること、その歴史的な意味を語られました。張司祭は関東大震災における朝鮮人虐殺を逃れて奈良教会に逃れました。「朝鮮人を出せ」という人たちにはだかつて張司祭を守ったのが当時の奈良基督教会の吉村司祭だったのです。当時の張青年は大震災、そしてキリストの愛に触れ経済学を学ぶことから聖職へと召されていったのです。

木村司祭は聖公会生野センターが任意団体の時代、長年に渡り運営委員長として奉仕されました。聖公会という小さな群れが聖公会生野センターを設立し大きな働きをなしてきた。その

ことに聖公会は本当に感謝し、また祈りと協働でもってセンターと共に歩いていくことが求められている、と語りました。

続いて林永寅司祭です。韓国で野宿者支援の社会宣教活動を先頭に立ち取り組んできた方です。林司祭は日本で聖職として働きながら日韓の間で感じることを語りました。日本ではよくサッカーの日韓戦や韓流について尋ねられるが、国と国という発想ではなく人と人としてつきあっていきたい。又韓流については「商業性」がベースにあるものでそれを持って韓国を語ることに限界があると言いました。

中村香さんは結婚を機に韓国で10年近く住んでいました。最初はソウル、それから農村に行き有機農業に携わって神戸に戻ってきたばかりです。韓国での生活はとても辛いこともあったが人と人との関係が濃密で日本から来た私にとっても居心地の良い経験を多くしたということでした。

## 【話を聞いて】

司会をしながら思ったのは最初に聖公会生野センターの原点は聖ガブリエル教会の歴史の苦難と喜びそして失われた聖堂の復興がルーツである、ということです。二つ目に聖公会生野センターのミッションは「歴史に応答する働き」であることです。今年に入って「領土」を巡って日本と韓国、中国の間で問題が生じています。まさにこの「問題」を語る前に欠落しているのが歴史です。1985年5月8日、第2次世界大戦終戦の記念日にドイツのヴァイツゼッカー大統領の「荒野の40年」の演説を思い出しました。少し長くなりますが引用いたします。

「ヨーロッパの諸民族は自らの故郷を愛しております。ドイツ人とて同様であります。自らの故郷を忘れうる民族が平和に愛情を寄せるなどということを経るわけにまいりましょうか。



開設20周年記念のDVD

いや、平和への愛とは、故郷を忘れず、まさにそのためにこそ、いつも互いに平和で暮らせるよう全力を挙げる決意をしていることでもあります。追われたものが故郷に寄せる愛情は、復讐主義ではないのであります。」

「問題は過去を克服することではありません。さようなことができるわけではありません。後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまいりません。しかし過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。」

ほんの一部ですがこの演説からは大統領の歴史に対する透徹した反省と隣人（隣国）への愛、そして「互いに平和で暮らせる」ことを感じ取ることができます。今こそ「歴史」を「今に」そして「未来に」つなげていきたいと願います。

三つ目に聖公会生野センターは「現場で生きる」ということです。32坪の2階建てという小さな空間に障がい者、高齢者、そしていろいろな人が出入りしています。来る人の動機は本当に多様です。しかしその人たちがここでくつろぎ、学び、生きる力を得て又出て行く、そんなセンターになりたいといつも願っています。

「一人一人が大切にされる」、そんな聖公会生野センターにこれからも一歩ずつ近づけるようにしていきたいと感じた、20周年の記念パネルディスカッションでした。

（お くあんひょん 聖公会生野センター総主事）

## はじめまして＝韓国で学んでいます＝

松山 健作

前回「韓国からの便り」連載を担当された中村香さんが韓国を発つ前、ともに韓国ソウル市庁前広場において、去る3月10日に開かれた「第28回韓国女性大会&子供たちに核のない世界を」という「脱核」のイベントに参加した。韓国でも「脱核」を訴える人は少なくない。なぜならば、隣国日本で福島第一原子力発電所が爆発した現実、韓国の人々にとっても大きな衝撃であったからだ。もちろん、韓国も原子力発電所（以下、「原発」と略記）保有国の一つである。現在の李明博政権は現存する21基に加え、将来的に7期の原発を建設することになっている。3.11の東日本大震災以降、私たちの社会は、原発と向き合い核廃絶を訴えていかなければ、明るい将来がないように思う。常に放射能の恐怖に怯えながら、生活をすることに新たな希望を生み出すことができない現実を目の当たりにしている。

私は学業することも文章を書くことも不向きな人間である。しかし、ただ何かを継続する忍耐力だけはあると信じていた。そんな思いが私の足を韓国へと向け、現在ソウルで暮らす契機になった。私は高校三年生のときに日韓聖公会青年セミナーに参加し、在日韓国・朝鮮人の強制連行について知った。そのとき、日本はアジアに対する大きな歴史的罪責を持っていることを認識するとともに、私はそれについて何とか関わり続けなければならないという漠然とした重荷を負った。いや、重荷を負ったのではなく、それは重荷を負わせた他者への歴史的責任がのしかかってきたという方が正しいだろう。そんな思いが、私の中で蓄積されて結果的にソウルのある大学の大学院で学ぶ機会が与えられ現在に至る。いま思い返せば、大学で学ぶことは本当の私の目的ではなかったかもしれない。むしろ、韓国の人々と出会い将来的に友好的な連帯関係を結ぶことが重要な目的であった。それが大学で学ぶという一つの方法として現れたのだと思う。

とはいうものの、大学に入ってみると、言語は違うし文化も価値観も異なるため常に不安と緊張の連続である。そう言ってはみるものの私の専門である韓国教会史のゼミ生は先輩後輩ともに温かく日本人である私を迎えてくれた。その先輩の一人に洪承杓（ホンスンビョ）という江原道出身の人がいる。彼は大学院に所属しながら、大韓基督教教会という出版社で働いている。

韓国キリスト教雑誌中で最も古い『基督教思想』という雑誌の編集長である。その雑誌の2012年3月号で「原子力とわたしたちの未来」という特集が生まれ7編の文章が掲載された。このとき、韓国でも原子力に強く抵抗するキリスト者がいることを知り、共感を覚えた。日本でも韓国の現状を紹介しなければならないと強く感じた。

その7編の文章とともに韓国のキリスト者が発している学術論文、宣言文などを集めて翻訳したものが『基督教思想』編『原子力とわたしたちの未来—韓国キリスト教の視点から』（2012年11月20日刊行、かんよう出版）である。私は企画するだけで翻訳には、携わることができなかったが諸先輩方が手を差し伸べ翻訳して下さいました。韓国に来てから何年経つだろう、ようやくその連帯の形として一つのもの作りができたのかもしれない。しかし、原子力への抵抗は、むしろこれからがスタートである。原子力というとても怖い脅威と暴力性を秘めた存在、それを操る権力にキリスト者として立ち向かわなければ、東アジアの平和はもちろん日韓の平和も実現することは困難であろう。今後より多くの方々の声と賛同がこれから希望を見出す力となることを信じて、また東アジアの連帯を強めて、韓国という地から平和について考え、将来的希望を見出したいと思っている。

(まつやま けんさく 韓国在住)



大韓聖公会ソウル主教座聖堂にて。キリスト教環境運動連帯事務総長の梁在成牧師の「脱原発」についての講演。

## 柳美里「ピョンヤンの夏休み」(講談社)

磯貝 治良



柳美里という作家にはモデル問題による名誉毀損裁判、評論家との論争、タブーに対する数々の挑戦などトラベル・メーカーの印象があります。小説は、どこを切っても血が吹き出しそうな感覚と文体、シチュエーションです。どの作品にも自傷の衝動と純な他者への親和が葛藤しています。

しかし、柳美里という人は、じつは素直な表現者なのです。この本を読むとよくわかります。

本の副題に「わたしが見た「北朝鮮」とあるように、2008年から2010年にかけての4度にわたる朝鮮民主主義人民共和国訪問記です。彼の地の人びととの出会いと交流とふるまい、暮らしと街の風情——それらが裸眼の観察と思考によってリアルに語られます。たとえば、本を読みながら街を歩く学生、河辺でなにかを指さしながら孫に教える老人、車座になって語らう若者たち、自転車をこぎながら通勤する労働者たち。そんなありふれた情景が、ゆったりとながれる日常の時間と人びとの暮らしを伝えます。そのことが、人らしい営みの限度をこえた日本の都会の時間と雑踏を、反語的にイメージさせます。

もちろん「招かれた人」である作者の目は、ピョンヤンを遠く離れた人びとの貧困と苦難には届いていません。そのことを差し引いても、目と身体でとらえた表象は彼の地の「あるがまま」の断面を描いています。故にこの本は、揶揄と誹謗、敵意と嘲笑、蔑視と排外によって塗り込められた、いわゆるバッシング本とは対極でありえています。

愉快なのは、訪朝が回を追うごとに人びとと国への親和力を進化させていく様子です。たとえば、

始めはぎこちなかった案内人のパクさん、その上司のチョさん、運転手ソンセンニムなどとの関係が肌合いを合わせるようにあたたかく深まっています。民族的情の交感と職務意識との見わけがつかなくなるほどに。通訳の金雪花さんが作者の10歳の息子チャンヤン（丈陽）に応じるきびしさと情感は率直で、二人の交わすシーンは秀逸です（チャンヤン君の虚言癖と博識は、小説家になる資質かもしれません）。家族で白頭山の天池湖に登る一幕も、国にまじわる楽しい苦難です。やはり、出会いと行動こそが親和に至る種子なのです。

見聞・紀行記をこえて、朝鮮半島の現代史をめぐる解説も随所に織り込まれ、意外な指摘もあります。北は自由のない監視国家、南は自由な民主社会——というのが定説です。作者はそれを逆回転します。南から訪ねる38度線では（評者も体験したことです）誓約書へのサインのほか細々とした注意事項があるが、北から38度線を訪ねる場合にはそれがないという指摘。南北どちらかの肩を持つというのでは分断思考の危うさですが……。

日常のなかに見いだす、作者の人生観・生き方の手法も語られて好感が持てます。

最後に余談をひとつ。2006年に評者と黒古一夫の編纂で勉誠出版から『〈在日〉文学全集』全18巻が刊行されました。その折、収録をお願いした57人の作家・詩歌人のうち3名から断られました。その一人が柳美里でした。『ゴールドラッシュ』『8月の果て』そして『ピョンヤンの夏』と書きついできた今なら、収録を応諾してくれそうな気がするが、どうだろうか？

(いそがい じろう 在日朝鮮人作家を読む会代表)

聖公会生野センターは今年、創立 20 年を迎えました。20 歳の「青年」に成長した今のセンターの姿と働きを見るたび、さまざまな困難を踏み越えてここまで成長してきたことに、感慨一頻り（ひとしきり）です。そして 23 年前、センターの実現に向け熱気に満ちた希望の日々を懐かしく思い出しています。

実は、1989 年 9 月、日本聖公会大阪宣教部が「在日韓国朝鮮人と日本人が共に生きる社会を目指して」と題し、同月 22 日から 24 日までの 2 泊 3 日の研修会「出会い in 生野」が催されました。場所は現在の聖ガブリエル教会ですが、当時は駐車場跡のままで、敷地の真ん中のバラック小屋の畳の部屋が研修会の場でした。

集った方々は、当時、日本聖公会首座主教の木川田一郎・大阪教区主教、沖縄から来られた仲村実明主教をはじめ、聖職の方々が 10 人、（うち 2 人は大韓聖公会司祭）。心身気鋭の若き植松誠司祭（現在の日本聖公会首座主教、北海道教区主教）のお姿も。講師、スタッフを含め参加

熱気に満ちた「出会い in 生野」大橋襄

者は 55 人、部分参加の方を加えれば 70 人以上の人々が集いました。

研修会は熱気に溢れました。在日の方の身上話「身世打鈴（シンセタリョン）」にみんなが涙を流し、日韓の歴史を学んで「目から鱗」が。また生野の味を楽しみ、生野のお風呂屋さんにも行きました。当時、生野地域活動協議会事務局の呉光現（オ・クワンヒョン）さんも講師として参加、「在日の人々の法的地位」について話されましたが、その後、生野センターが発足の際、総主事に就任され、今に至ったのでした。当時、実行委員長を務めさせていただいた時の熱気は、まだ私の中で生き続けています。

生野センターのこれまでは、決して順風満帆ではありませんでした。しかし神様の恵みと、兄弟姉妹、また友人たちの祈りと物心の支えによって今に至りました。短い生野センターの歴史ですが、聖公会生野センターは生野の地の「小さな奇跡」の連続だと思いつけています。

（おおはし たかし）

余韻

■感謝です。第 1 号から編集委員長を務めて下さった大橋襄さんが今号で退任されます。そして長期間にわたり「時のしるし」を書いてきた井田泉司祭、「韓国からのお便り」を送ってくれた中村香さんも前号で終了しました。本当にありがとうございました。これからもいろいろな人の助けを受けてウルリムを出していきたいと思えます。■今日（11/15）、朝刊を読んだら衆議院解散、総選挙の一面見出し。この一年で北朝鮮から始まり、フランス、ロシア、アメリカ、中国、韓国、そして日本。まさに東北アジアや原発にかかわる国がすべて選挙・政権交代だ。偶然とはいえこんな年はもうないだろう。■2012 年は「島＝領土」を巡って嫌な年だった。相互依存の共生のために、先人の知恵を思い出したい。■来年は新しい指導者たちが本当に朝鮮半島の平和定着、南北の和解、そして東北アジアの平和構築に努力して欲しいと思う。EU のノーベル平和賞のように「アジア市民」として共に生きていける社会になるスタートの年になることを願っている。（ピクアンチャ）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

- ◇正会費 年額 1口 10,000 円
- ◇後援会費 年額 1口 3,000 円から
  - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
- ◇自由献金・クリスマス献金
  - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
  - ・銀行振込 三菱東京UFJ 銀行 東大阪支店
  - 普通預金 4654965 「特定非営利活動法人聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0002

大阪市生野区小路 3 丁目 11 番 19 号

TEL06-6754-4356/FAX06-6224-7869

E-mail: ikuno@nssk.org

http://www.nssk.org/province/ikuno

発行人：大西 修

編集人：大橋 襄

ウルリムは再生紙を使用しています。